

## サブノジュニア号

# 第20回JBCスプリント競走を制す

(有)藤沢牧場 生産

11月3日、東京の大井競馬場で開催された「第20回JBCスプリント競走(G1)」(ダート1200m)で(有)藤沢牧場生産のサブノジュニア号(牡6歳、父 サウスヴィグラス、母 サブノイナズマ 大井所属)がG1で初勝利を挙げました。

サブノジュニア号は前走こそ5着だったものの、その前の3戦において全て勝ち星を挙げており、最後に4馬身の差をつけ大勝や逃げる馬を差し切るなど、最後の伸びが印象的な勝ち方をしていきます。本走は中団やや前辺りに待機し、残り200mから抜群の伸びを見せ、1馬身以上の差をつけて



見事勝利しました。

誕生から約1年半世話をした、(有)藤沢牧場の常務、藤沢亮輔さんは「出走馬の顔ぶれを見ると、前が速くなることは確実視されていたため、サブノジュニアの強みである末脚がより生きる展開になると思っていました。前々走では後方から最後の直線で差し切れましたが、前走のように中央馬が相手となると届かなかったので、この反省を生かし、本走はやや前目で競馬が出来たので最後に差し切れたと思います。それなりに自信はありました。」とのことでした。



(有)藤沢牧場 常務  
藤沢 亮輔さん

本馬のエピソードとしては「本当に怪我也病気もせず、ずっと放牧していました。また、馬房に入れた記憶がほとんどなく、月1回の削蹄の際に見るくらいでした。気性が悪いわけでもなく、非常に扱いやすく身体も立派でコンディションが落ちることなく順調に成長した印象です。夜間放牧している際に近くの牧場の方に馬が脱走していると教えて頂いたことがあり、それがサブノジュニアでした。おそらく鹿に驚いたのだと思いますが、放牧地の出入り口にある単管を曲げて脱走しており、怪我こそなかったものの、元の放牧地に戻れずにいたことがあったくらいです。」とのことでした。



サブノジュニア号  
写真提供 産経新聞

きてG1を勝ったというだけで、サブノジュニアの礎となる繁殖牝馬は当社の藤沢澄雄社長が導入し、それを気に入ってくれた馬主さんがおり、そこから代々交配を重ね30年かけて生まれたのが本馬です。私は飼養管理において個性を出し、その中でトップを取るこゝが出来るといいますが、この仕事の醍醐味だと思っております。ただ、私たちだけの力で馬が走るようになつたという実感はなく、サブノジュニアに関わった調教師さんや騎手、多くの方々の力も大きいのです。そして、なによりも馬主さんの執念に感動しました。昔から当社の生産馬で大きいレースを勝ちたいと言って頂いており、3代も前から交配を重ね、ようやく結果が実り本当に良かったです。」と話していました。



母馬 サブノイナズマ号  
お昼寝中です